

宇部工業高等専門学校 平成22年度 年度計画 実績報告書

I 業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1 教育に関する事項

(1) 入学者の確保

① 入試方法の改善策としては、今年度から普通科または理数科からの編入をも受け入れるように変更した。また、入学者募集要項において、推薦の出願資格を分かりやすい記述に改善した。

さらに、2度と入試ミスを起こさぬ為、原因究明・対策WGを設置し原因を徹底的に究明した上で、学力検査採点業務要領を新たに制定した。

②・10/12～1/20にかけて、小学校9回、中学校1回の計10回の出前授業を行った。第1回オープンキャンパスを8月24日(火)に実施し、629名(昨年552名)の参加者を得た。第2回目は、11月13日(土)に高専祭と併せて開催し、176名(昨年218名)の参加者があった。

・広報委員会において、広報誌等の見直しを行った。夏休み前に、1年生に対し、母校訪問を行うよう依頼し、24名が21中学校を訪問した。本校HPに、入試情報などを可能な限り公開した。

③・小中学生向けの、宇部高専の教員の研究紹介誌の作成に着手した。完成は23年度の見込み。高専機構作成の「キラキラ高専ガールになろう」を各種イベントで配布した。入試広報のための中学校訪問時に、進路担当教員に女子生徒の積極的な出願をお願いした。女子学生が少ない機械工学科、電気工学科及び制御情報工学科では、実習服の好イメージ化、数少ない女子学生の各種広報イベントへの活用などの方策を検討した。女子学生の将来(OGからのメッセージ)と題した女子卒業生の社会における活躍ぶりを紹介した広報DVDを制作した。

・遠隔地からの志願者を増やすための広報活動の一環として、今年度学寮ホームページの作成を行っており、平成23年度早々に一般公開する。

(2) 教育課程の編成等

①学科構成や専攻科のあり方を検討するために、7名によるワーキンググループを立ち上げ、現状の問題点の抽出作業を行った。

②現状の楔形を維持しつつ、3学科で専門科目に係わるカリキュラムの一部改正を行った。

- ③ 1 学科あたり 5～8 回， 5 学科全体では 36 回、現職企業技術者を招聘して特別講義を実施した。
- ④ 「総合演習」においては、「タッチパネルを用いた情報処理システム」などの実用的な課題を用意し， 1 チーム 5 名で組織力を発揮して実現する内容に改めた。「社会システム工学実験」においては，既存の数理モデルの拡張，情報システムの機能追加などを学生自身のアイデアに基づいて行わせるように改めた。
- ⑤ プログラミングコンテスト，ロボットコンテスト等へ学生が積極的に参加するよう学級担任，クラブ顧問を通じて周知した。その結果，英語プレゼンテーションコンテストに初参加し，全国 3 位に入賞した。また，中国地区のロボットコンテストでは準決勝で敗退したが，特別賞を 3 つ獲得した。

(3) 優れた教職員の確保

- ① 昨年度に見直しを行った教員の採用及び昇任に関する規則により， 2 名の講師を准教授に，また 1 名の准教授を教授に昇任させた。また，今年度，准教授 3 名，講師 3 名，助教 1 名を採用した。
- ② 教員公募要領に女性教員を積極的に採用したい旨明記することとした。なお，物質工学科の教員公募の際に，女性研究者が 2 次試験（面接審査）まで進んだが，研究業績等の面で採用には至らなかった。また，英語や中国語などの語学については，教員の異動は無かった。
- ③ 教職員の教育業績，研究業績，地域貢献度を数値的に評価した上で， 6 月期と 12 月期の勤勉手当の成績優秀者選出の参考資料とした。
- ④ 「学生指導に関する情報の共有と引き継ぎ」というテーマで 9 月 24 日に F D 研修を開催した。また，初めての試みとして 6 月 8， 9 日に授業参観を開催し，およそ 300 人名の保護者が来校した。（その際，アンケートを実施したが，非常に好評で次年以降も実施してほしいとの意見が多数を占めた。）
- ⑤ 学生の授業評価が特に優秀であること，並びにクラブ指導において顕著な功績のあった教員 1 名の表彰を行った。
- ⑥ 平成 23 年度高専・両技科大間交流制度において 1 名派遣，1 名受け入れが決まった。また，平成 24 年度以降の交流計画について，具体的な検討を始めた。

(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

- ① 人間性豊かな実践的技術者養成を目指す，教養教育，外国語教育，専門基礎科目について学年に応じてきめ細かく，修得させるため，下記のとおり実施した。
 - ・(国語) 読むことに関しては， 1～3 年生の全学生に「一行感想」のシートを配布し， 1 年間に 20 冊以上の本を読ませる取り組み

を国語科全体で行った。その結果、多くの学生が 20 冊以上の本を読み、なかには 100 冊以上の本を読む学生もいた。書くことに関しては、形式や型に合わせて書かせることで、多くの学生が作文や小論文が書けるようになった。高学年のクラスでは、小説の創作を通して文学的文章の作成方法についても理解を深める取り組みや、文学作品の読解と考察を文章と図解による資料にまとめ、プレゼンテーションに結びつける取り組みも行った。聞くことに関しては、ノートを取りながら口頭試問に答えるやり方を行ったり、新聞記事のディクテーション（聞き書き）を行ったりすることで、聞く力を習得させることができた。また、スピーチやプレゼンテーションの授業のなかでは、聞いたことに対して質問やコメントさせる取り組みも行い、多くの学生が積極的に発言できるようになった。話すことに関しては、事前にスピーチメモを作らせてテーマや構成を明確にし、1 分程度のスピーチやプレゼンテーションを行わせた。また、高学年のプレゼンテーションの授業では、各自の工夫点を板書しながら口頭発表したり、自分で作成した図解資料を使って 10 分間のプレゼンテーションを行ったりすることで、プレゼンテーション能力の向上を図った。

- ・(社会) 1～3 年生では、基礎学力定着に努めるために小テストを実施し、同時にレポート作成を課し、自ら調べて文章を書くという作業を通して自学自習の定着化を試みた。評価方法はシラバスに明記されている。ただ、小テストはそれなりの回数を確保したが、レポート作成を多く課すことは全体としてみると不十分であり、次年度以降の課題である。また、授業では日常生活との関連を意識しながら現在の社会問題を随所で取り上げ、世の中への興味・関心をもたせる工夫をした。

4 年生以上では、多様な文章を要約し、多面的な見方とともに自分の考えを文章で表現する能力を身につけさせるための一つの方法として、試験を記述式とする一方、レポートも課した。成果は成績資料ファイルで確認できる。授業の中で意見を求め、あるいは資料を読み合わせるなどの方法で学生との双方向の授業展開を試みているが、班別発表やクラス討論などの本格的導入は次年度以降の課題である。

- ・(英語) 読解力や文法力を強化するために、教科書や参考書を用いて説明するだけでなく、音声教材を同時に用いることで、学生の記憶に残りやすくなるような配慮をした。また、状況に応じて授業中に辞書を使用させながら、学習内容の説明補強に努めるとともに、使い方の指導も行った。単語参考書の内容はワークブックにより反復学習させ、小テストや定期試験で内容を問うことで、学生の理解度を確認した。授業以外では英検を年 2 回実施し、61 名が受験した。TOEIC IP は年 5 回実施し、合計 823 名が受験した。そのうち 1 回は 3、4 年生全員を対象としたが、事情により欠席した学生以外は全員が受験した。また、専攻科 2 年生は全員 400 点以上取得することが出来た。

- ・(芸術) 音楽では、自分の感覚で音を内面から自分の力で引き出せるよう、前年度よりも楽器の演奏に重点を置き指導した結果、かなりの効果が出た。質の高い演奏を鑑賞するため世界の人々の誰もが一度は聴く珠玉の名曲を選曲し鑑賞した。歌唱は英語、イタ

リア語、ドイツ語の歌を原語で暗譜させることにより、表現力の向上を図った。

美術では、昨年同様、年間に4種類の実技課題（デッサンなど）を用意し、自由な発想や表現に重点を置き指導した。

- ・(理科) 基礎的な事項がしっかり理解できることを目標に、物理では「教科書の説明文、問題文の読解」を先ず第一に考えて授業を進めてきた。新しい項目を学ぶ時に先ず、文章を読むという習慣は付けることが出来た。教卓実験は10数回行い、学生実験も3回行うことが出来た。

化学の小テストは1年生で40回余り、2年生で20回余り実施した。その結果、成績不良者を減少させる事が出来た。

- ・(数学) 2年生の解析Ⅰでは計画通り週1度小テスト（前後期とも13回、計26回）実施した。3年生では専門教科の教員と協力して、数学の復習補講を実施し小テストを8回程度行なった。1年生は補習（週1回50分）を利用して、多くの計算問題テストを実施した。

共通する科目において、1, 2, 3年各学年とも定期試験を共通問題にして、各学年全体の成績を把握することが出来た。これらのことを通じて、実力向上を図ることが出来た。

その他には、年2回行なった「実用数学技能検定（数検）」において、1回目67名、2回目91名と受験者がかなり増加したことが挙げられる。

- ・(体育) ほとんどの学生が、自らの安全を意識して運動することが出来た。しかし、怪我をする学生もいることから継続して指導していきたい。運動技能は個人技能が身につくよう粘り強く反復練習に取り組み、ゲームが出来るようになった。3・4年生では、組織的なゲームの展開することが出来、チーム内においてお互いの理解を深め、コミュニケーションをとることが出来るようになった。

保健では、“いのち”の尊さ・大切さ、自らの健康について一人一人が考えることが出来た。また、心肺蘇生法などの実習をとおして、知識だけでなく、実践できる力、“知恵”を養うことが出来るようになった。

- ②これまでは材料力学に特化していた内容を、次年度からは数学・物理をはじめ、力学、計測工学、科学技術など、シラバスをより広範囲な内容に改善した。
- ③情報処理Ⅰにおいて、教材を作成してホームページにアップロードして授業を行った。また、プログラミング論Ⅱ、プログラミング演習Ⅱ、データベース論、ネットワーク技術論のeラーニング用コンテンツを整備した。
- ④毎回の授業で課題を課す教科や年数回程度課す教科まで、教科により差異はあるものの、家庭学習の習慣化を図るための努力は継続的に実施した。

- ⑤応用物理では夏季、冬季休業中に演習課題を出し、休み明けに試験を実施した。また、教材や授業資料をホームページにアップロードして効率化を図り、能動的な学習習慣を身につけさせるように努力した。
- ⑥一般科の数学科教員が専門学科の会議に年2回出席し、補講の効果検証、実施方法等について意見交換を実施した。また、専門科目の分野毎の教員間ネットワーク組織により、各専門科目間の流れや授業内容の吟味を行った。一方、1年生を対象とした専門科目の「制御情報工学セミナー」は、昨年度までは入学直後の前期から通年を使って行ってきたが、授業アンケートから新入生にとって前期は学校に慣れることで精一杯と感じられたことから、今年度からは新入生に心の余裕ができる後期からスタートさせるなど、きめ細かな対応を図った。
- ⑦・本科では、実験・実習科目、演習科目、卒業研究を重視しており、これらの科目の単位数は各学科の専門科目のうち20%程度を占めている。特に卒業研究は重要な科目として位置付け、新しい課題に挑戦する資質を養成するために出きるだけ1人1テーマを与えている。
- ・専攻科では、特別研究の内容を積極的に学会発表させ、国内の学会(17件)のみならず、国際シンポジウム(10件)においても発表させた。
- ⑧山口大学や広島大学などの他大学、また地域企業との共同研究のテーマを個々の学生に取り組みさせた。卒業研究の成果は、学内の卒業研究発表会だけではなく、各学科ともに学協会での発表も積極的に行わせている。
- ⑨教員のレベルを確保するために、今年度から特別研究指導教員の「資格」を導入した。次回のJABEEプログラム継続審査に向かって、プログラムの検討を行うワーキンググループを立ち上げた。
- ⑩昨年設置された検討会で単位互換科目の見直しを行い、今年度から新たに山口大学工学部側から留学生の「日本語」科目、TOEICの上級者クラス対象科目が提供され、本校からは4年生の「体育」を提供することとなった。
- ⑪広島大学総合科学部・大学院総合科学研究科と学生及び研究者の交流を推進するため、教育研究交流協定を11月に締結した。
- ⑫新しい教養・導入教育の試みとして、1年生に対して全学科共通のマトリックス型基盤教育による技術者スピリットの醸成を指向した授業を開始した。

(5) 学生支援・生活支援等

- ①1年生全員を対象に心理テストを11月に実施し、担任は個人面談やクラス運営のための資料とした。12月には全教員を対象として、学生相談室主催の講演会(軽度発達障害学生の対応)を開催した。
- ②セクシャル・ハラスメントのみであった防止・対策に関するガイドラインを、すべてのハラスメントを対象とするように改編し、

教員会議等で全教職員に周知するとともに、学内教職員用のHPに「宇部高専ハラスメント対策への取り組み」として掲示した。

- ③学生の就職・進学を支援する組織として、キャリア支援室の新設（平成 23 年 4 月）を決定し、その準備のためキャリア支援室準備WGを立ち上げ、4月からの活動に向けて作業を進めた。

導入教育として、1年生を対象に、10月のホームルームで進路ガイダンスを実施、また後期のホームルームを活用して、3回の環境教育を実施した。本科4年生、専攻科1年生を対象にした就職セミナー「企業側から見た学校(授業)との関係」を6月17日に開催、また、本校のOB、OGによる就職説明会を9回開催した。本科3年生を対象にした就職セミナー「企業が求める人材・これからの過ごし方」を7月20日に開催した。インターンシップの参加状況については、本科生158名(75.2%)、専攻科42名(95%)であった。

- ④保護者会を9月8日に実施した。保護者からあった要望、意見への対応策（回答）を作成の上、保護者に送付した。次年度の保護者会を9月7日に開催することを決定した。

- ⑤オープンオフィス制度はほぼ定着しており、本年度も実施した。年度末には各教員より相談件数を分野別に報告してもらい、教務・入試係が集計作業を行った結果、延べ9,514名の利用があった。

- ⑥・実施回数を増やして2回とした。前期終了直後に加えて学年末にも実施することにより、次年度に向けての指導方針の検討・修正および再確認ができた。

・清掃関係の行事については、寮棟により実施状況にバラつきがあった。徹底するために棟長・指導員の意識を高める必要がある。

・留学生との交流行事について、寮生会役員と検討を行った結果、次年度は、身近な集団として寮生会役員との懇談会を実施することを決めた。

・一斉清掃を定期試験後に実施することにより、寮内は相当綺麗になった。

・定期的に行っている寮生会役員会において、適宜指導方法について確認している。また、上級生に対しても、集合する機会があるときに指導を行っている。その結果として、行き過ぎた指導等は無くなっていると考えられるが、一方で、低学年に対する指導が難しくなってきた。そこで、来年度より指導方法を大きく変更し、違反点数制を導入することとした。

- ⑦授業料免除に関しては、高等学校等就学支援金制度の導入に伴い対象者や要件が大幅に変更されたため、掲載内容を慎重に検討のうえ、ホームページの掲載事項を修正した。奨学金についても、日本学生支援機構以外の各種奨学金について、種類や募集時期等の具体的な情報を提供する内容に改めた。

(6) 教育環境の整備・活用

- ①施設の利用状況調査の結果のとりまとめを行った。
- ②第二体育館の男女別トイレの整備，課外活動のための更衣室・部室等の整備を完了した。
- ③「マルチメディア学習室」及び「視聴覚教室」の認証機能を有した有線 LAN 情報コンセントを利用可能にした。
- ④・アンケート結果に基づき，設備面では天井灯の照度アップ，閲覧用のロングカウンターテーブルに仕切り板を設置した。良書の選定や幅広い利用者のニーズに応えるための対策として，専任の司書（非常勤）を採用した。新入生に対して，図書館の利用方法を周知するクラス別オリエンテーションを実施した。それに伴い1年生の利用冊数は前年度の2倍程度に増加した。また，文献検索講習会を本科4・5年生，専攻科生，教職員に対し実施した。
・「一人年間10冊，みんなで1万冊」というポスターを作成し，クラス掲示や学内に掲示することにより周知の徹底を図った。また，そのほかに，新着図書のお知らせや季節や行事に応じた特集コーナーを設置したり，「ことばの森」という学生への情報提供紙を不定期ではあるが発行したことにより，前年度を大きく上回る貸し出し冊数の成果を得た。
- ⑤無線 LAN 設備を導入済の教室において接続試験を行い，eラーニング環境を整備するための基礎データを収集した。
- ⑥対話集会で聴取した意見について実施できるところから随時実施している。シャワーのカラン，椅子やコンロなどの設備面の更新，食事のメニューの検討を行った。また，盗難防止策として，防犯カメラの増設も行った。予定より3ヶ月遅れとなったが，全寮生に対して，環境整備の一環として空調機の設置に関する調査を8月に行い，その結果を学寮改修計画に盛り込んだ。女子留学生の増加に備えて，パーティションの移設を行い，セキュリティを確保しつつ部屋数を増やした。留学生受入れの問題点として，長期休業中における残寮への対応が挙げられるが，具体的対応策については検討するまでには至らなかった。

2 研究に対する事項

- ①教育コーディネータの活動等により，13件の共同研究が実施された中で，5件が新規に開始された。なお，卒業研究及び特別研究の総テーマ数203件のうち企業ニーズを取り込んだ研究テーマは34件であった。割合は，本科と専攻科の全研究テーマの内それぞれ16%と17%であり，本校全体では17%であった。
- ②中国地区8高専で共同開催する「テクノ・マーケット」や，やまぐち事業化支援・連携コーディネート会議の幹事校として同会議に参画し，「マッチング会」を開催・参加して，教育コーディネータが中心となり他高専や大学の研究テーマに関する情報収集を行った。第1期と同様，学生を参画させて高専－大学の共同研究を実施しており，共同研究相手の大学には山口大学，東北大学，広

島大学、九州工大などが挙げられる。

- ③平成 22 年度は 2 件の特許の単独出願を行った。前年度の著書、学術論文や国際会議等で公表された研究業績は、冊子「地域共同テクノセンターニュース&レポート」の紙面中で速報として紹介し、直に目に触れることで教職員の意識を高めることを平成 21 年度より実施しているが、この趣旨に則って平成 22 年度版を作成した。
- ④平成 22 年 7 月 31 日応募締切で 26 件の申請を受け、過去 5 年間の研究業績、科学研究費補助金申請・採択実績等を考慮し、21 件に配分した。
- ⑤ J S T の科学技術コーディネータと、山口大学副学長を講師として招き、外部資金及び科学研究費補助金に係る説明会を 9 月 28 日に開催し、54 名の教職員の参加があった。
- ⑥11 月 24 日に「宇部高専 SEEDS & NEEDS シンポジウム」を市内のホテルで開催し、65 名の参加者があった。2 月 22 日に「宇部高専テクノフェア 2011」を本校にて開催し、6 社の会社・技術説明と、32 件の専攻科 2 年生による研究成果のポスター発表のほか、本校教員による「宇部市バス運行案内システムの開発から運用まで」と題した共同研究成果の事例報告 1 件が行われた。また、LLP アクセルとの併催事業「Craftsmanship Working Studio 企業説明会」を同時開催し、200 名を超える参加者があった。人材育成プログラムについては、学内向けにはキャリア社会人力体感講座（Dream Egg）を、対外的にはものづくり担い手育成事業（Craftsmanship Studio）を開講した。
- ⑦教育コーディネータと地域共同テクノセンター教育研究推進室委員が共に、8 月末～10 月上旬にかけて地域企業 15 社を訪問し、共同研究として取り組みたい課題、本校の研究シーズとのマッチング等についてアンケート調査した。
7 月 16 日に下関商工会議所との連携事業で「宇部高専先端技術紹介セミナー」を新規に実施し、「(排・廃)水処理」と「燃料電池」のテーマに関わる研究シーズ紹介が本校教員 4 名によって行われた。

3 社会との連携や国際交流に関する事項

(1) 社会との連携

- ①・小中学生を対象としたものづくり教室など 5 講座、一般市民・企業技術者・学生等を対象とした電験 3 種受験対策講座など 4 講座開講し、延べ 211 名が受講した。また、地域の中小企業技術者を対象とした『即戦力技術者養成講座』、『設計技術者即戦力講座』、『難削材加工即戦力講座』の 3 講座を開講し、26 社から 65 名の受講があった。
・図書館を引き続き市民に開放した。図書館では地元中学校の要望を受け、3 名の中学生の職場体験学習を実施した。図書館開放

の周知手段として、ホームページや図書館開放案内パンフレットを市内の公共施設に配布した。

- ②「宇部高専研究シーズ集 2010」を8月に発刊，研究シーズ検索システム（U-SEARCH）については，新たに英語版を構築・公開した。また，「地域共同テクノセンターニュース&レポート」21号を6月に刊行した。
- ③宇部高専 Seeds&Needs シンポジウムは宇部高専テック&ビジネスコラボレイト及び宇部キューブサロンと，また，宇部高専テクノフェア 2011 は宇部高専テック&ビジネスコラボレイトとそれぞれ共催して開催した。山口銀行の紹介により，平成 21 年度から入会したヤマグチ・ベンチャー・フォーラムでの活動を継続して行った。
- ④宇部高専卒業生がUターンする際の就職支援として，本校HPに再就職支援リンク集（山口県再就職支援，マイナビ求人情報，山口県若者就職支援センター リクナビ求人情報）を掲載した。
- ⑤・2名のコーディネータを活用して，県内学術機関との交流・連携を深めた。大学間では「やまぐち事業化支援・連携コーディネート会議」，高専間では「テクノ・マーケット」等の事業を通じ，機関を越えたコーディネータの連携活動が継続して実施された。
 - ・一部の教員ではあるが，山口大学工学部と共同で研究を行っている。
- ⑥・ホームページのトップページトップニュースについて，積極的に記事を書き載せるよう広報委員等に周知した結果，74 件（前年 40 件）に増えた。
 - ・主に女子学生が活躍しているDVDを作成し，積極的に情報公開をはかった。
 - ・新たに発足したNPO法人「うべ未来 100 プロジェクト」との共催で，8，10，12 月の3回，広報イベントー科学館ーを常盤公園で開催した。

（2）国際交流

- ①・平成 23 年度外国人対象入試に参加し，本校を希望した留学生 2 名の合否判定を行った。（結果は 2 名とも不合格。）
 - ・海外インターンシップとして，ハルピン工業大学へ 5 名，コムソモリスク工科大学へ 4 名派遣した。
- ②東義科学大学で合同シンポジウムを開催し，専攻科学生が発表をおこなった。中国地区 8 高専連携国際交流事業として開催された国際シンポジウムで 10 件の発表をおこなった。
- ③宇部留学生交流会（常盤工業会主催）は，留学生本人に直接案内されているが，基本的に留学生は参加している。なお，本校独自の留学生支援行事としては，九州方面への見学旅行（12 月 11 日），日本文化（茶道）体験（1 月 19 日），5 年生の留学生送別会（2 月 23 日）などを開催した。
- ④国際交流事業の実務を担当する窓口として国際交流室を 8 月に立ち上げ，国際交流を学校全体で取り組む体制を構築した。

4 管理運営に関する事項

- ①校長、3主事、事務部・課長による定例打合せ会を原則毎週火曜日に開催し、意見交換、情報の共有化を図り、意思の疎通を図っている。また、このメンバーを構成員とする危機管理会議を設置し、危機管理体制を構築した。なお、検討課題が生じた場合は、速やかに組織・運営検討委員会を開催し、本校の運営にあたっている。
- ②定例打合せ会及び組織・運営検討委員会において打ち出された教育・研究・管理運営面に関する方針を、運営委員会において審議し、決定している。
- ③管理運営体制について検討を行い、平成23年度より校長、副校長、4校長補佐体制とすることを決定した。
- ④平成22年11月に運営諮問会議を開催し、宇部高専のキャリア教育、地域連携・社会連携について、意見を伺った。
- ⑤事務組織等の見直しについて検討を行い、平成23年度から総務課に学術・産学担当課長補佐を置くこととした。

5 その他

(1) 自己収入の増加に関する事項

- ①「外部資金及び科学研究費補助金に関する説明会」を9月28日に開催した。教職員の参加者は54名であった。また、研究費配分において科研費公募申請者・継続者に一律10万円の上乗せ配分を行うこと、間接経費の1/3を研究者に還元することとし、外部資金確保を支援することとした。科学研究費補助金の公募に対しては44件の新規申請がなされ、本年度の実績は、新規6件と継続9件の合計15件が採択された。
国立高等専門学校機構の企業技術者等活用プログラムの採択を受け、これまでの2名の教育コーディネータに加え、更に2名の教育コーディネータを配置することができた。新規に加わったコーディネータにより、宇部市周辺地域の中小企業の活性化・経営基礎の充実を図ることを目的とした勉強会「寺子屋づくり」を発足させた。
- ②平成22年度の公開講座では9講座を開設し、211名が受講した。本校の特徴を生かした工作や資格取得対策、ソフトウェア利用などの講座を実施し、受講者アンケートから7講座が受講満足度70%以上の評価を受けた。
共同研究12件、受託研究3件、寄附金17件を受け入れた。
- ③平成22年度高等専門学校改革推進経費プログラムに2件（他高専との連携事業）、平成22年度特別教育研究経費（企業技術者等活用プログラム）2件が採択された。

(2) 固定的経費の削減に関する事項

- ①平成 17 年度～21 年度のエネルギー使用量を運営委員会にて報告した。22 年度分からは、定期的（3 ヶ月毎）に報告を行った。
- ②省エネについて、徹底するため、夏期及び冬期のエアコン使用期間にパトロールを行った。
- ③会議資料の省略については、引き続き、教員会議の資料を事前にメール配布するとともに、他の会議についても資料や議事録などをホームページに掲載することなど具体的な検討を始めた。
- ④施設については年 2 回の巡視、物品については年 1 回の物品検査時に現状の調査を行っている。
- ⑤施設改修時に照明を LED に交換、エアコン等の電気製品の更新時には、省エネタイプに取り替えた。
- ⑥学寮改修の予算要求書には、太陽光発電設備を要求している。

(3) 環境負荷低減に関する事項

- ①地球環境を意識した技術者を養成するために、今年度入学生より全学科共通の総合科目として、環境・安全をキーワードとした「マトリックス型基盤教育による技術者スピリットの醸成プログラム」を 10 月 19 日、11 月 16 日、1 月 25 日の 3 回実施した。
- ②管理棟及び図書館棟にグリーンカーテンを設置した。